

オピニオン

耕論

図書館の未来

図書館は便利だ。ベストセラーも雑誌も読み放題。施設は増え続け、貸出数も30年前の4倍以上に。一方、町の本屋さんには激減した。図書館はどうあるべきか。読書の秋に考えてみた。



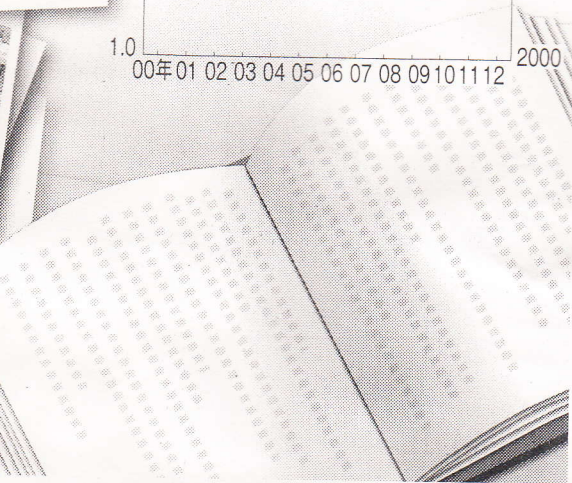
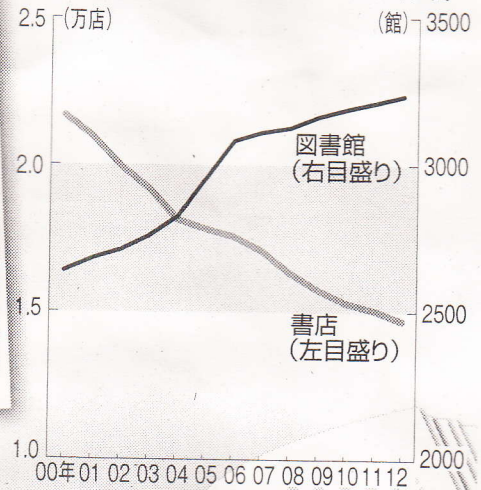
武雄市図書館



千代田区立千代田図書館

書店と図書館の推移

図書館は日本図書館協会、書店はアルメディア調べ



新しい「広場」に脱皮せよ



52年生まれ。77～2000年、子どものための図書館をベネチアに開館して、館長を務める。以来、イタリア各地で新しい図書館の企画運営に携わる。邦訳書に「知の広場」

アントネツラ・アンニヨリさん

図書館アドバイザー

仙台を皮切りに、札幌、東京、鳥取、京都と、各地のさまざまな図書館を訪ねて講演し、多くの方々と話す機会がありました。熱心な市民グループの図書館作りの活動などに強い印象を受けましたが、公共の図書館の多くはイタリア同様、問題を抱えていると思いました。

これからの図書館は、単に本を貸し出すだけではやっていけません。そのことに無自覚なまま、古くて創造性に欠けたサービスを提供しているところが多すぎたと思います。

どうあるべきか。一言でいえば、広場のようにコミュニティの中心にあることです。人々が何かを一緒にやるために、あるいはショッピングセンターに行くかわりにふらりとやってくる。そんな場所です。本の並べ方を工夫したり、集まって楽し

い場所を作ったり、新しい図書館作りは、世界的な動きです。背景の一つは、経済危機で

す。もともと政策的に優先順位が下がり、予算も減っています。市民に本当に必要とされる場所でないければ、また新しいサービスを提供できなければ、予算は減るばかりです。

もう一つはデジタル化の進展など新技術の広がりです。机とイスさえあればいいはずなのに、なぜ、わざわざ建物を作るのか。一緒に何かをすることは人にとって欠かせない欲求であると同時に、情報があふれる時代、的確な情報にたどりつくためには助けが必要だからです。そのためにも、図書館員も変わらなければなりません。

図書館はこれからはますます社会に必要とされる場所になると思います。経済危機以来、本の

貸出数は増加に転じています。

本が読まれなくなっただけでも事実です。半分の人が本も新聞も読まない、という調査結果もありました。そんな人たちが経済的余裕のない人、ネットにアクセスできない人のために、公共図書館はありべきです。

図書館は、民主主義社会を支える公共の土台です。本を所蔵して提供することは、知を底上げして市民を市民たらしめる、つまり社会に参加するための基本となるサービスです。

最も大切なのは、中立的な場所であるべきだということだと思います。子供も大人も、経済力や国籍、宗教によらず、等しくサービスを受けられることです。

ツタヤによる図書館の運営をどう思うか、あちこちで尋ねられました。世界でも珍しいと思いますが、書店の知恵やノウハウには大いに学ぶべきです。重要なのは、図書館がその使命をしっかりと認識して主体的であることです。本質的な問題は、本を誰が選び、誰が責任を持っているか。公共サービスとしての本質を見失わなければ、協働はどんどん進めるべきです。図書館と書店は、本を読んでもらうという共通の目的があるので、すから。

(聞き手・辻篤子)

集客力最大化で街に活気



72年生まれ。「TSUTAYA」を展開するカンパニー・コンビニエンス・クラブ（CCC）執行役員。15年に2例目となる図書館を宮城県多賀城市に新設予定。

たかはし
高橋 聡さん

CCC・図書館カンパニー
社長

昨年1月、代官山蔦屋書店を

見学に来た佐賀県武雄市の樋渡啓祐市長が、CCCの増田宗昭社長に突然「図書館をまかせたい」と頼みました。社長が即答し、その場にいた新規事業担当の私が図書館プロジェクトの責任者をやることになりました。

とはいえ、武雄市がどこにあるのかも知りませんでした。本の仕事もしたことはないし、図書館にもほとんど行ったことがない。基本は図書館もツタヤの店舗を出店するのと同じだと考えました。まずは、市民が図書館に何を期待しているかを把握すること。数百人の対面調査を行い、CCCの発行するTカードから武雄市と同規模の5万人の都市でどんな本やサービスが望まれているかを調べました。結果は「雑誌」と「カフェ」。具体的にはライフスタイルを提

案するブック&カフェ。ただ、本と違って雑誌は毎週発行され、購入コストがかかります。

しかし、運営費はできるだけ絞り込まないといけない。そこで書店と図書館を組み合わせることにしました。館内のスターバックスでコーヒーを飲みながら無料で雑誌を読むスタイルです。雑誌のタイトルは100から600に増やしました。

現場で働いて感じたのは図書館の仕組みが「提供者目線」だったことです。多くの図書館が採用する日本十進分類法では「バラバラ菜園」の本が、産業↓園芸↓蔬菜園芸と分類される。菜園なのに産業ですよ。利用者のことを考えていない。新しい分類システムを作り出した。変更後の「菜園」は趣味実用↓園芸↓家庭菜園です。リニューアルオープンしたの

は4月ですが、7月末までの来館者は34万人。過去最多だった02年度の年間来場者数29万人をすでに突破しました。スターバックスは、平日午後や土日はほぼ満席の状態が多く、サンドイッチなどもよく売れています。また、本好きが訪れる図書館は実際に本を買っていく人も多い。本の売り上げは通常の2倍以上で推移しています。

ただ、システムなどにかかった投資を回収するには、武雄のような図書館が10館以上必要です。しかも、一過性のブームで終わらせないためには「街づくりに」の視点が必要です。「ツタヤに頼めば終わり」と考える依存型の自治体とは組めません。マスコミは今でも「レンタル大手」と紹介しますが、ツタヤは書籍販売で業界トップです。活字離れが加速していくなかで、本屋をどうやって残していくかに問題意識があります。このままでは、地方の子どもたちが東京に来て「生まれて初めて本屋を見た」と驚く時代が来ってしまうかもしれない。もともと図書館が持つ集客力を最大化する我々のモデルこそが、縮む地方に本屋を残す有力な選択肢だと考えています。

（聞き手・古屋聡一）

良書のため書店と協力を



51年生まれ。札幌市内で「くすみ書房」と古本を読みながらコーヒーを楽しむ「ソクラテスのカフェ」を展開する本屋商のオヤジ。北海道書店商業組合理事長。

くすみ 久住 邦晴さん

久住書房社長

図書館と町の本屋が目指すべき到達点は同じだと考えています。それは素晴らしい本を提供し、読んでもらうこと。一言でいうと、読書の普及です。

良い本には、よりよく生きるためのヒントが詰まっています。逆境にいる人が一歩前に進み、突破口を見つけれられる。正義や友情は人に教えてもらうものではなく、本を読みながら主人公と対話し、自分の頭で理解していくものです。

若者の「本離れ」も進んでいます。確かにネットや携帯に比べて本を読む動作は、負荷が大きいです。だから口を酸っぱくして「あれを読め」「これを読め」と言い続けたいといけません。

9年前に始めたブックフェア「本屋のオヤジのおせっかい中学生はこれを読め!」は、そんな思いをこめました。リストは500冊。高校生や小学生にも広げました。リスト作りを手伝ってくれたのが、公立図書館

や小学校の地域開放図書館の司書の方々でした。図書館と書店の連携で自信を持って薦められるリストが完成しました。

ただ、本は売れません。実は6月に閉店寸前まで追い込まれました。良い本を売ろうとする努力は、利益にはつながらないのです。理想と現実の両立に頭を悩ませています。危機を知って「友の会」の会員に応募する人が急ぎよ数百人集まり、何とか乗り越えました。

雑誌を売るコンビニ、「ブックオフ」などの新古書店、ネット販売に押され、町の本屋の経営は追い込まれています。町の本屋でつくる北海道書店商業組合の理事長をしています。1980年代には700を超えていた組合員数が現在は116まで落ち込みました。

本屋は一度閉店したら、復活するのは無理です。家族で立ち

寄れる近所の本屋が消えていけば、子どもたちが本と出会う機会が失われてしまう。

ここから先は暴論ですが、図書館には地元書店から「定価」で本を買い上げて欲しいくらいです。全国に3千館あり、すごい購買力です。従来の入札制度では、零細の本屋はほとんど利益が出ませんから、「定価」であることが重要です。そうでもないのと町の本屋は生き残っていくことは難しいのです。

図書館には、本屋では売れない良書も並べられる。良い本は人の心を豊かにし、時には人生を変えることもあります。図書館の一部に接客数を増やすためにバスターセラーやコミックに頼るところもあるようですが、存在意義を否定する動きです。図書館にはもっと踏み込んで地元作家を自分たちで育てるぐらいの気概が欲しいものです。

図書館と書店は、同じ文化発信の最前線として協力しながら未来の大人たちへの責任を果たしていくべきです。

(聞き手・古屋聡一)